

# 適性検査Ⅰ

## 注 意

- 1 問題は **1** のみで、7 ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は四十五分で、終わりは午前九時四十五分です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 答えは全て解答用紙に明確に記入し、解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 6 受検番号を解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

東京都立三鷹中等教育学校

問題は次のページからです。

1 次の〔文章1〕と〔文章2〕を読み、あとの問題に答えなさい。

(※印の付いている言葉には本文のあとに〔注〕があります。)

### 〔文章1〕

ホテルマンの「俺」は、招待状のあて名書きの注文をしに、自宅で書道教室を開いている遠田のもとを訪れた。夏の書道教室では、生徒たちは遠田から出された「風」というお題に取り組んでいた。ところが遠田は「なにかがたりないっていうか、堅いんだよなあ」と言うと、突然窓をすべて開け放ったのだった。

「ほら、これが夏の風だ」

遠田がそう宣言するのを見はからったように、暑気を切り裂いて一陣の風が吹き抜け、庭の桜の葉を、そして生徒たちの手もとの半紙を、さわさわと揺らした。

「どんな風だった？」

窓を閉めながら遠田が尋ねると、

「ぬるかった」

「そうかな、けっこう涼しかったよ」

と生徒たちは口々に答える。

「じゃ、いま感じたことを思い浮かべながら、もう一度『風』って

書いてみな」

遠田は再び文机に向かって腰を下ろした。「そういう習慣をつけときゃ、そのうち真夏にも冬の『風』を書けるようになる」エアコンが「一からやりなおしだ」とばかりにゴウゴウと音を立てる。でも生徒たちは気を取られることなく、また涼しくなっていく部屋のなかで真剣に半紙に向きあい、それぞれの夏の「風」を書きはじめた。

納得のいく書を書きあげたものが、つぎつぎと遠田に見せにくる。最終的には生徒全員が文机のまわりに集結した。

遠田は一人一人の書を丁寧に眺め、

「うん、軽やかでいい感じの風が吹いてる。この『虫』みたいな部分の角っちは、つぎからもう少し筆を立てて書くようにしたほうがいいかもな」

「夏の蒸し暑さがよく出てるじゃねえか。だが、そこを重視しすぎて、二画目のハネがちよっともたついちゃったな。ま、滞留する風もたまにはあるってことで、よしとするか」

などと感想を述べつつ、各人の書に朱墨で大きく花丸を描いて返した。正座した生徒たちは、自分以外の書の講評にも耳を傾け、遠田の言葉にうなずいたり笑ったりする。

素人の俺の目にも、窓からの風を感じたあとの生徒たちの字は生き生きと躍動して見えた。もちろん、生徒たちの長机にある、遠田が手本として書いた「風」とはレベルがまるでちがう。遠田の手本は、夏の嵐のような猛々しさを秘めながらも、いわゆる「習字のお手本的なうまい字」だった。それに対して生徒たちの「風」は、いびつだったりたどしかなかったりする。

でも遠田は、手本に無理に近づけるためのアドバイスはしなかった。俺もいつしか文机ににじり寄って、生徒たちが遠田に差したす半紙に夢中で見入った。それぞれが感じた夏の風が、思い思いの形で文字にこめられていた。まとわりつくような「風」。清涼でホッと一息つける「風」。やっぱりエアコンの利いた部屋のほうがいいなという「風」。

俺は感心した。なるほど、「風」という一文字だけでも、こんなに多種多様で自由なものだったのか。書道とはこんなもののびと気楽に取り組めるものなのか。なにより、遠田に書を褒められ、改善点を教えてもらう子どもたちの、誇らしげで楽しそうな表情といったらどうだ。

たとえば指導法に少々下品だったり型破りではと思われるところはあるが、遠田は書道教室の先生として、やはり逸材なの

だろうと察せられた。書家としてのレベルは、俺にはよくわからない。ただ、手本の文字が力強く端整で、目を惹かれるものなのはたしかだ。

(三浦しをん「墨のゆらめき」による)

## 〔注〕

一陣の風——ひとしきり激しく吹く風。

文机——読み書きをする机。

滞留——物事がどこおること。

躍動——元気にはつらつと動くこと。

猛々しさ——力強いさま。

いびつ——形がゆがんでいること。

たどしかなかったり——まだ慣れていないために、言葉や動作がなめらかではなかったり。

型破り——考えや行動が、ふつとはちがっていること。

逸材——すぐれた才能。また、それをもつ人。

端整——すがたやかたちが整っていること。

## 【文章2】

朱莉は、買い物をしていても、店員さんから声をかけられないことがあり、それは自分が地味だからではないかと思ひ、しょんぼりしていた。そんな時に通りかかったカフェの前に「自信が持てるあんバタートースト」という看板が出ていたのに目が引き寄せられ、思い切ってドアを開けて入ってみた。そして店主のそろりさんに、さっそく「あんバタートースト」を注文してみた。

「わあ、美味しそう」

朱莉はそそくさとマスクを外し、両手でパンを持ち上げると、ずっしりと重量感があった。溶けたバターが、たらりと指を伝って流れ、慌てて口に運ぶ。カリッとした食感のあとにあんこのほくほくした甘さが続く。甘すぎないので、たっぷり盛られていてもくどくない。食べ進めていくと、甘さの中にバターの塩つけが加わった。あんバター、この鉄板の組み合わせを考案した人は天才だ、と唸る。

甘いとしょっぱいのコラボに、食がどんどん進む。残りあと数口になったところで、ふと疑問に思う。

「あれ？ 何でしたっけメニュー名。自信のある、でしたっけ」

「まあ、もちろん自信作ですけど」

店主は腰に手を置いて得意そうに言ってから訂正した。

「でもメニュー名は〈自信が持てるあんバタートースト〉です」

「ええと」

朱莉が何から尋ねるのがいいのかと言ひ淀む。

「メニュー名の由来を聞きたいわけですね。小豆の効能はご存じですか？」

そろりさんに問われ、朱莉は懸命に考える。さっきのドラッグストアにも並んでいたが、コスメには、アイマスクやパックに小豆が使われているものもある。

「からだをあたためる効果があるんですよ。あとはむくみ防止とか」

体内の余計な塩分を排出したり、整腸作用もあるはずだ。美容関係のSNSを何気なくチェックしているうちに、そんな知識も目に入ってくる。

そろりさんは朱莉の言葉に何度か頷く。

「ポリフェノールの含有量もすごいんですよ」

赤ワインに多く含まれていると聞く成分だが、小豆の含有量は赤ワインを上回るとそろりさんは教えてくれる。

「ポリフェノールは体の酸化を防ぐのに有効なんです」

細胞レベルで健康になれるからこのトーストを食べると（自信が持てる）ようになるのかと納得していると、朱莉の様子にそろりさんは「それだけじゃないですよ」と続けた。

「そのあんこ、実は砂糖を使っていないんです」  
すっかり食べ終えた皿を指差し、驚くようなことを明かされた。

朱莉が食べたあんこは、確かに甘さは控えめではあったけれど、砂糖が入っていないとはとても思えなかった。水飴や蜂蜜を使っているのだろうか。しかしそろりさんは首を横に振る。

「小豆と米麴だけで作っています」

麴は肉を柔らかくしたり、即席で漬物が作れたりすると、かなり話題になったことがある。柔らかく煮た小豆に米麴を加え、温める。するとこんなに甘いあんこが仕上がるんだそうだ。

「コレを使うんですよ」

小豆を発酵させるために適温を保つには、ホームベーカリーの機能が役立つという。嬉しそうにキッチンにデンと置かれたホームベーカリーを披露してくれるが、もっと気軽に炊飯器でも作れるそうだ。

「麴の力を借りて発酵させると、でんぷんは糖分になるんです」

そしてたんぱく質はアミノ酸に変わるんだそうだ。

「さて、甘さや旨みが増えるとどうなるでしょう」

そろりさんからクイズを出されるが答えはひとつだろう。

「美味しくなる」

朱莉が勇んで回答する。正解だったようで、店主が「うむ」と頷いた。

「口当たりも柔らかくなって、食べやすくなるのも特徴です」

麴の力で炊いた米が甘酒になるのも同じ原理だと聞き、至極納得する。

もともとあった成分が麴の力で美味しくなる。それと同じように、自分の特性を活かせば「旨み」、つまり自信になるのだ、と教えてくれた。

「そろりさんは『どうめいマント』って知っていますか？」

麴と小豆のパワーのおかげか、それとも甘いとしょっぱいの相反する力が効いたのか、朱莉は自分のことを話したくなった。

子どもの頃は憧れの道具だった。でもいつしか、知らないうちに「世間」という得体の知れないものから、勝手に被せられたり、脱がされたりしているように感じるものになった。日頃、他

人から無下に扱われている気がする、そろりさんに訴える。

「それでは、自分で着脱できるようになればいいんじゃないですか？ あなたが自分でマントを支配して操れるようになれば、また便利な道具に戻るんじゃないですか」

そろりさんが曇ったメガネの蔓をくっと上げた。

「自分で？ それが出来ないから困っているんですよ」

朱莉が訴える。

「だから自信を持つことが大切なんですよ」

そろりさんは穏やかに言って、ホームベーカリーを温めるように両手を添えた。

「ところで自信ってなんだと思います？」

そろりさんの声に朱莉は顔を上げる。改めて意味を尋ねられると、うまく言葉では言い表せない。まごついていると答えを教えにくれた。

「自分を信頼することですよ」

自分を信じる、信頼する。字のごとくだ。

「大地の木のよう、しっかりと足をつけて立つ、それが自信です」

それは自立ということでもあるのだと、そろりさんが自分の足を左右に開いて腕を組んでみせた。

「自立、自信……。そうですね」

「世間」では、画一的な美しさが基準になっている。ショップの店員やカフェのバイトの態度を思い起こす。美容家によって施された朱莉の顔は個性や表情を消していた。誰かが決めた「正しい」とする方向に皆が向かい、同じものを追求する必要があるのだろうか。

(標野凧 「こんな日は喫茶ドードーで雨宿り。」による)

〔注〕

※ そそくさと——落ち着かないさま。

※ 鉄板——そのとおりにすると成功が確実だとされて  
いる方法。

※ 効能——効きめ。はたらき。

※ コスメ——化粧品全般。

※ 米麴——お米に、食品の発酵はっこうに有効な微生物びせいぶつを付  
て増加させたもの。

※ ホームベーカリー——家庭でパンを作るための調理器。

※ 至極——きわめて。まったく。

※ 無下に——そっけなく。

※ 蔓——メガネの、耳にかける部分。

※ まごっついてる——どうしてよいか分からなくて困こまっている。

※ 画一的——どれもこれも同じで、かわりばえのしない  
ようす。

〔問題1〕〔文章1〕に「窓からの風を感じたあとの生徒たちの

字は生き生きと躍動やくどうして見えた。」とあるが、それは  
なぜか。三十五字以上四十五字以内で説明しなさい。

〔問題2〕〔文章2〕に「自信が持てるあんバタートースト」と

あるが、そろりさんはなぜこのメニューに「自信が持  
てるあんバタートースト」という名前を付けたのか。  
そろりさんの意図を想像して、以下の空らんにあては  
まるように六十字以上七十字以内で説明しなさい。

（ ）というメッセージをお客さんに伝えるため。

〔問題3〕あなたは、人が自信をもって生きていくためには、

周囲の人とどのような関わりをもつことが必要だと  
考えますか。〔文章1〕〔文章2〕の内容をふまえて、  
三百六十字以上四百字以内で、具体例を挙げて説明し  
なさい。



## 〈きまり〉

○ 題名は書きません。

○ 最初の行から書き始めます。

○ 段落だんらくを設けず、一まずめから書きなさい。

○ 、 や 。 や 「 などそれぞれ字数に数えます。これらの記号が行の先頭に来るときには、前の行の最後の字と同じまずめに書きます。

○ 。 と 「 が続く場合には、同じまずめに書きます。この場合、「。」で一字と数えます。